
幸福の代償

あかん子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福の代償

【Nコード】

N9341H

【作者名】

あかん子

【あらすじ】

バイトを終えて、家に帰り、パソコンで暇をつぶしてから早々と寝床に向かう。今日もそんなつまらない一日だと思っていた。一通の奇妙なメールさえ届かなければ……不幸を取り扱う店に翻弄される男の話。

『あなたの不幸承ります』

思わずマウスから手を離し、その一文を凝視した。

圭介にとってはいつも通りの一日だった。面白みも何もない、三日もすれば今日何をしていたかなどきれいさっぱり忘れてしまうであろう、日常の「コマ」。

朝からバイトに行つて日が沈む頃に家に帰り、パソコンを開いて暇をつぶす。そして十二時前には寢床に入る。

判で押したような代り映えのしない毎日。自分の人生はベルトコンベアーのようだと思最近彼は思う。決まりきつた道順を歩むことしか出来ず、自分の流されていく先に不安を覚えながらもそれを変えようとする勇気もない。なぜなら、踏み出した先にも道が続いているなんて保障はどこにもないのだから。

あいにくメールを送ってくる知人に心当たりなどない。

どうせくだらん宣伝か何かだろう。

そう思いつつも件名に興味を引かれた彼はメールを開いていた。

【古物商・ろんろん】 あなたの不幸承ります

全国の不幸な皆さん、朗報です。あなたの不幸を当店では高く買い取ります。あなたに絶望しか与えなつた出来事を我々が希望に変えて差し上げます。

買い取り価格は不幸の度合いによって上下します。また、倍率は以下の表を参考にして下さい。

- ・過去に降りかかった精神的苦痛を伴う不幸……………一倍
- ・過去に降りかかった肉体的苦痛を伴う不幸……………一・五倍
- ・現在体験中の精神的苦痛を伴う不幸……………二倍
- ・現在体験中の肉体的苦痛を伴う不幸……………三倍

当店は古物屋も兼ねております。ぜひ、ご不用になった物をお持ちより下さい。曰くのある品についてはより高値をつけさせていただきます。

「なんなんだこれは」

思わず声に出して呟いていた。本文の最後に記された住所は彼のバイト先からそう遠くない場所を示している。

つまりない悪戯メール、そう思いながらも彼が眠りに落ちたのは十二時をとっくに超える時間だった。

翌日、バイトを終えた彼の足は昨日のメールにあった住所へと向かっていた。

悪戯ならそれはそれでいい。少なくとも仕事中に気が散ってチーフに怒鳴られるようなことはもう起こらなくなる。そう判断しての結論だった。

俺は不幸についてなら一家言を持っている。小さい頃に両親は離婚し、母親は父から多額の慰謝料をぶんどったまま俺を置いて姿を消した。やさぐれた父は仕事を辞め、俺への暴力を鬱憤晴らしのけ口にした。

たまりかねた俺は中学卒業と共に母が唯一残してくれた金を頼りにポロアパートに引っ越し、中学の先生の紹介してくれた工場に就職した。

これからは一人で生きていく。もちろん不安はあったが、父親の元を離れられた喜びの方がはるかに大きかった。工場の仲間や先輩たちともうまくいっていた。

しかしそんな生活も長くは続かない。自動車産業の低迷下に伴い大幅な社員削減が求められ、俺もそのターゲットの一人に選ばれたからだ。

その後はずっとフリーターを続けている。家賃と生活費を捻り出

すのがやっとで、今年で二十歳になろうというのに家にはテレビはおろかCDの一枚すらない。工場勤務時代に買ったパソコンだけが唯一の娯楽品だった。

会社帰りのサラリーマンや、買い物を終えて帰路に着く主婦でこつた返す大通りを逸れて、薄暗い路地へと足を踏み入れる。高い建物によって西日を遮られた道は、一足早く夜になってしまったかのように暗く、空気さえも淀んでいるかのようにだった。

「ここらへんだな」

昨日見た住所を頭の中で思い返しながらそう呟く。思ったよりも入り組んだ道が続いていたので確証はないが。

それらしき建物を求めてしばらくあたりを散策していたが、ふとその看板が目に入った。

【古物商・ろろん】

見た目は普通の建物と変わらない。典型的な店舗付き住宅というやつだ。おそらく二階が生活スペースになっているのだろう。

ただ、その建物の壁も屋根の瓦も周りの路地の雰囲気に合わせてかのように暗く、くすんで見えた。

『カランコロン』

入店者を告げる鐘が鳴る。その音に反応して振り返ったのは、七十に手が届くかどうかといった歳の腰を曲げた老婆だった。

「いらつしやいませ」

しわがれたその声にやや気後れしながらも、他に客のいない店内を見回す。店の名前通り、様々な骨董品が並んでいる。海中時計や煙管、古文書の類や日用家具、その他もろもろ。

その中で特に目を引いたのは、店の奥、ちょうど老婆がいるカウンター横にあるガラスケースだった。

中を除いて、思わずぎょっとした。

“遺書”

そう書かれた封筒が真つ先に目に飛び込んできたからだ。その他にも、赤黒い染みのこびり付いた果物ナイフやら、先端に輪を作ったロープやら、一目で何かよからぬことに使われたであろうものが並んでいる。

「気になりますかな？」

いつの間にか背後に忍び寄っていた老婆の一言に、思わず飛び上がった。

「ええ、まあ……」

歯切れの悪い返答に老婆はニヤニヤと口元にいやらしい笑みを浮かべている。俺が封筒に注目していることに気がついたのだろう、その真偽を問われる前に口を開く。

「もちろん本物ですよ。この遺書は一週間前に自殺した女の恋人から買い取ったものでしてねえ」

そう言われれば、この封筒だけ回りのものに比べてやけに真新しい。

「内容についてはお話し出来ませんが、わたくしのコレクションの中でもかなりのお気に入りになりました」

値札が付いていないことから、ここにある展示品は売り物ではないらしい。

「残念ですが、お売りすることはできませんで。いつひっひっひ頭に響く、薄気味悪い笑い声に顔をしかめながら、

とんでもない所に来てしまった。

と、早くも後悔が押し寄せてきた。

「して、お客様は何かご入り用で？」

そう聞く老婆に対して渋々答える。

「この店で、不幸を買い取ってくれるという情報を耳にしたんだが……」

「それをどこで？」

すかさず老婆が問いかける。その目は、品物売る店主のそれとはかけ離れて見えた。

「えーと、パソコンのメールで」

未だ半信半疑の俺の答えを聞くや否や、俺の手をがっしりと掴み、老人とは思えぬ力強さでカウンターまで引っ張っていった。

あっけにとられる俺の前に、老婆が満面の笑みで答える。

「それはそれは、ようこそおいで下さいました。お客様の話を聞く前にいくつか確認事項がございますので、どうぞその椅子にお掛け下さい」

その言葉にはどこか有無を言わさぬ強制力がある。俺が席に着いたのを確認すると、にっこりと頷いて店の奥に向かって声を張り上げた。

「アンナ！ お客さんが来たよ！」

呼びかけに応じて姿を現したのは、一人の女性だった。

年の頃は俺と同じくらいだろう。腰まで届く長い黒髪に、地味な服装。病的に白い肌をしている。俺が「どうも」と会釈しても一瞥しただけで、すっと視線を逸らされてしまった。

なまじ整った顔をしているだけに、無言でいられるとそれだけでプレッシャーを感じる。特に気になったのが、彼女の眼だ。その瞳からは、同じ年頃の女が持っているであろう情愛や希望といったものが何一つ感じられなかった。

アンナと呼ばれた娘が老婆の隣、つまりは俺の向いに腰を下ろし、引出しからノートと筆記用具を取り出す。それに合わせるようにして、老婆が口を開いた。

「さて、お客様のお話はこのアンナが全て記録致します。お客様のお話の内容如何によってお支払いする金額は上下します」

そう言って、昨晚見た表と全く同じ内容が書かれた紙を俺に手渡す。

「お客様のお話は全てここだけのもの。他者に渡すようなことは決して致しません。また、いかなる場合でも一度記録したものを破棄することはありません」

皺だらけの両手を組んでカウンターの upper に乗せる。

「最後に、当店の取り扱っている商品についての一切の他言を禁じます。もしこれが破られたと判断した場合、前述の約束を守る義務を我々は負いません」

老婆が俺の目を見据えて言う。要するに、不幸をバラされたくないければこの店のことは黙っていると云っているのだ。その高圧的な態度に少々むかつ腹が立ったが、どうやらあの広告に偽りはないらしい。

「規約は以上になりますが、ご同意頂けますか？」

「ああ」

俺の言葉に満足げに頷いた後、アンナに目配せしてから話を促す。「それでは、お聞かせ下さい。あなた様の不幸を。ああ、これは速記術を使いますので普段のスピードで話して下さい結構ですよ」アンナを指差して言う老婆の言葉に納得してから、俺は話し始めた。生い立ちから今に至るまでの人生を。その中で感じた痛み、苦しみを。

言葉はとめどなく溢れてきた。よく、“辛いことは話せば楽になる”とか言うやつがいるがそれは嘘だ。はっきりと言葉にして口から出した瞬間にそれは真実になる。今まで目を背けてきた現実に無理やり目を向けさせられるような圧迫感。

全てを話し終えたとき、俺は全力疾走した後のような疲労を全身に感じていた。

アンナがペンを置いたのを確認してから老婆が俺に聞く。

「以上で終わりですか？」

「そうだ」

ぼんやりとした目で老婆を眺める。自分の人生を改めて人に語るというのが、これほど辛いとは思わなかった。二十年も生きてきて成し遂げたこと、幸福だと感じたことが何一つない。佐藤圭介という人物の矮小さを突きつけられたようで、いたたまれない気持ちで胸がいっぱいになった。

すると、老婆がいつの間にか書きあげていた一枚の用紙を俺に見

せる。そこには俺の話の要約部と四つの不幸のうちどれに該当し、いくらで買い取るかが書き記してあった。

「それが伝票代わりになります。お持ち帰り頂くことは出来ませんがね」

何か老婆が言っているようだが耳に入らない。紙の最後に書かれた合計金額に目が釘付けになっている。

「お客様のお話は過去のものが大半でしたが、なにせ質もよければ量も多かった。その金額で満足頂けるでしょうか？ いっひっひっひ」

「ああ……これでいい」

紙を持つ手が震えている。そこに書かれた数字は、俺のバイト半年分の給料を軽く上回っていた。

アンナから札束を受け取り、未だにはつきりしない頭で店を後にする。

「またのお越しをお待ちしております」

老婆の声がとても遠くに聞こえた。

家に帰ってから改めて札束を見つめる。

俺の不幸の値段。これまでの人生の値段。

それを思うと、今すぐこの金を全て使い切ってしまいたい衝動に駆られる。

その夜も、結局よく眠れなかった。

今まで一固まりの金を手にしたことのない人間が、急に大金を手に入れたらどうなるか。

計画的に使おうなんて気は最初の一日でどこかに消え去った。

これまで手に入らなくなったものを買い漁り、出来なかったことに片っぱしから手を出した。いわゆる“大人の遊び”と言われるものもやってみた。金の魅力を初めて知った快感もあるが、何よりこの札束は俺の不幸そのものを象徴しているようで、長く手元に置いてお

くことに激しい抵抗を感じていたからだ。

そうこうしてるうちに、気が付いたら金が底をついていた。まだあの店に顔を出してから一ヶ月も経っていない。

「ちくしょう！」

持っていた茶碗を床に叩きつける。勢いあまって生活費にまで手をつけた反動は食生活にも及んでいた。

「不幸だ。不幸があればまたあの店に行ける……」

過去の不幸があれだけの値段で売れたのだ。現在体験している不幸を売ればどれほどの値段になるか、考えるだけで身震いがした。

しかし、あの店を出てからこれといった不幸など経験していない。むしろ、今までにないくらい幸福な一時だった。それを一度経験してしまつた以上、もうそれなしでは生きていけない。

「こうなつたら、自分で不幸を作るしかない……」

その日から俺は、わざと怪我をしそうなキツイ仕事に応募し、心身を痛めつけた。それが原因で他のバイトをクビになつても、また一つ売る不幸が増えたと思えば気にもならなかった。

そうして、ある程度の不幸がたまつた頃、あの店に顔を出す。

想像していた通り、現在進行形の肉体的痛みを伴う不幸はとても高く売れた。

もらった金を大事にしようと思いつつも翌日にはそんな気持ちはいささぱり消えている。不幸の代償として得た金で自身を満足させることは、この上もない快感だった。

何度、そんなことを繰り返したのだろう。

折れた足を引きずり、変形した腕で杖をつきながら店を後にする。もらった札束に目を落としながら今の自分を振り返り、愕然とする。

いつしか俺は、ベルトコンベアーからはみ出していた。

幸福を得るために束の間の不幸に甘んじるのではなく、不幸になるために自ら幸福を避けている。そんな自分にはいつまで経っても幸せなんて訪れないのだと気付いてしまった。

「ははは……とんだ道化だな、俺は」

今日手にした金など、支払いが滞っている家賃や光熱費、足や体中の治療費に充てれば瞬く間になくなってしまっただろう。

そして、今の俺はとても働けるような状態ではない。頼る身内もない。売れるだけの不幸はもう売ってしまった。

家についてからも何もする気が起きなかった。その時、ふと脳裏をよぎったのは、あの店に展示されていた一枚の封筒だった。

寝ころんでいた体を起こし、机に向かって筆を執る。今の気持ち、どうしようもない心境をせめて誰かに知ってほしかった。自分の存在を、確かに佐藤圭介という人間がここにいたんだということの証を残したかった。

出来上がった便箋を封筒にしまい、署名をする。それを持って外に出た。

『カンカンカンカンカン』

電車が来ることを踏切が告げている。その音は警告ではなく、彼を永遠の安息へと導く歌声に聞こえた。

何とも皮肉なものだ。今まさに最大級の不幸を経験しようとしているのに、彼にはそれを売る術がない。

でも、それでいい。この残酷な世界から離れられるのなら、それで。

踏切をくぐりぬけ、迫る電車に向かって彼は身を投げ出した。

封筒が宙を舞う。

遠くで誰かの叫び声がした。

「おばあさま。朝食の支度が整いました」

アンナの声につられて、老婆は持っていたファイルから目を離す。そのファイルにはアンナが書いた速記文を文章に起こしてまとめたものが綴じられていた。背表紙には『佐藤圭介』という名前が入っている。

朝食が並べられたテーブルにつき、朝刊に目を通す。そして、三面記事のとある一節に目を止めたまま、動かなくなった。

『……在住のフリーター、佐藤圭介さん（20）が電車に飛び込み自殺。現場は凄惨な状況』

老婆の口元にゆっくりと笑みが広がっていく。

そのままファイルを持って席を立ったかと思うと、自室へと向かう。そこにある本棚には老婆が手にしているものと全く同じファイルがぎっしりと詰め込まれていた。

本棚の一番端に持っていたファイルをしまうともう一度にんまりと笑ってからテーブルへと戻っていく。

自室のドアを閉める前に呟いた老婆の独り言が部屋に木霊する。

「毎度、ごひいきに。いつひっひっひっひ」

『カランコロン』

瞳に暗い色を湛えた女性が入店する。その女性が老婆に差し出した一枚の封筒。そこには、

“佐藤圭介”

と、署名がされていた。

「いらっしやいませ、お客様。あなたの不幸、高く買い取ります」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9341h/>

幸福の代償

2010年10月8日15時30分発行